

声の仏念

編集・発行：「御同朋の社会をめざす運動」岐阜教区委員会広報部
〒500-8882 岐阜市西野町3丁目1 電話(058)262-0231 FAX(058)263-7353
http://www.hongwanji-gifubetsuin.jp/ E-mail:info@hongwanji-gifubetsuin.jp

2014(平成26年)7月1日発行 vol.234



法統継承式執り行われる

—— 法統継承に際しての消息 ——

本日、私は先代門主の意に従い、法統を継承し、本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主に就任いたしました。

ここに先代門主の長きにわたるご教導に深く感謝しますとともに、法統を継承した責任の重さを思い、能う限りの努力をいたす決意であります。

釈尊の説き明かされた阿彌陀如来のご本願の救いは、七高僧の教えを承けた宗祖親鸞聖人によって、浄土真宗というご法義として明らかにされ、その後、歴代の宗主方を中心として、多くの方々に支えられ、現代まで伝えられてきました。その流れを受け継いで今ここに法統を継承し、未来に向けてご法義が伝えられていきますよう、力を尽くしたいと思います。

宗門の過去をふりかえりますと、あるいは時代の常識に疑問を抱かなかったことによる対応、あるいは宗門を存続させるための苦渋の選択としての対応など、ご法義に順っていないと思える対応もなされてきました。このような過去に学び、時代の常識を無批判に受け入れることがないよう、また苦渋の選択が必要になる社会が再び到来しないよう、注意深く見極めていく必要があります。

宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁のある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対しても、いかにはたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。

また、現代のさまざまな問題にどのように取り組むのか、とりわけ、東日本大震災をはじめとする多くの被災地の復興をどのように支援していくのかなど、問題は山積しています。

「自信教人信」のお言葉をいただき、現代の苦悩とともに背負い、御同朋の社会をめざして皆様と歩んでまいりたいと思います。

平成二十六年 六月六日
二〇一四年

龍谷門主 釋 專如

キッズサンガ

「キッズサンガ」、この不思議な言葉も、皆様、聞きなれてくださったでしょうか？ 仏さまをご縁としてお寺に集まる子ども達は、毎年少しずつ増えているようです。

第四回郡上組キッズサンガは、「みんなあつまれ お寺で遊ぼう」のスローガンのもと九月八日、八幡町河鹿浄願寺様で開かせていただきました。当日は雨天にもかかわらず幼稚園児から小学六年生まで四十数名が集まりました。



風船をふくらまして、ねじりながら作った色とりどりの花はとてもきれいで満足気な子ども達でした。昼食は、ビハラー、

御法話を聞く姿勢も板についてきました。仏事のお話を聞かせていただいた後、きちんと正座してお勤めもできました。お寺で遊ぼうタイムでは昨年人気だった「宝探し」でプレゼントをゲットしてご満悦。次は田中先生のご指導による「バルーンアート」です。細長い



平成25年9月8日
八幡町河鹿浄願寺





仏教女性会、寺族女性会の方々が調理された子どもに合わせた二種類のカレーライスで、絶品でした。

午後は工作です。昔からある竹トンボならず紙トンボというのをご存じでしょうか？羽根の部分の竹を紙に変えて、三枚の厚紙を少しずつずらしながら貼り合わせて微妙なカーブを作り、竹ひごをつければ出来上がり。身近な材料を使って出来上がった自作の紙トンボを早速飛ばして「飛んだー飛んだー」と歓声をあげると、飛ばし方を教えてもらう子、賑やかなひとときでした。自分で作って遊ぶという何でもない事のようにですが、これは人間性を育てる大切な事であると思います。郡上組は地域も広く二十五ヶ寺が集まるのは大変な事ですが、今後もキッズサンガ推進の為、ご協力をよろしくお願います。掲載しました楽しそうな写真、ご覧あれ。御堂の中で楽しく遊ぶ子ども達、阿弥陀様に合わせる小さな手等、ほほえましく見させていただきました。

郡上組キッズサンガ

新「香光殿」

上棟式行われる



教化センター(仮称)は

香光殿と命名

昨年十一月から建設工事が始まった香光殿は、鉄骨の柱が立ち、屋根の形が出来上がり、床のコンクリートうちの工事が終わり、四月二十四日(木)午後二時より、教区内寺院の寺族・門信徒を始め岐阜幼稚園園児・保護者ら約二二〇名が参加し上棟式を行いました。法要に引き続き河村信昭法要委員会事務所長(岐阜別院院輪番)、横山善道法要委員会委員長が挨拶を致しました。

その後、岐阜幼稚園園児三〇名により大きな掛け声に併せて二本の綱を引いて棟木をあげる工匠式を執り行いました。さらに、場所を境内に移し、餅まきや菓子まきを参加者全員で楽しみました。本格的な内装工事に入り、瓦上げ、外内装の壁仕上げやクロス張り、電気配線等を行い、完成へと近づいております。

完成は今年十月を予定



▲餅まき

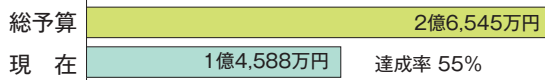


▲新 香光殿 鳥瞰図

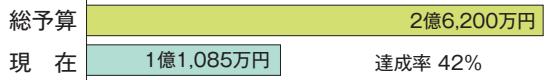
事業予算と現況（一部）

◆総事業予算 7億8,018万円

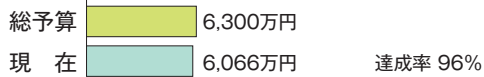
●崇敬寺院門信徒懇志



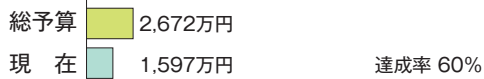
●永代経(院号)懇志



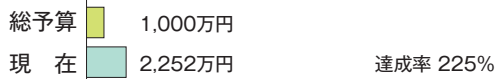
●別院門徒懇志



●僧侶懇志



●特別懇志



御進納ありがとうございました
(2014(平成26)年6月18日現在)



▲上棟式・法要



▲上棟式事務所長あいさつ

▼工匠式・棟木のつなをひく
岐阜幼稚園児



永代経法要勤まる

永代経(院号)懇志進納者

岐阜別院に永代経(院号)懇志を納めていただいた方の永代経法要が、四月二十一日(月)午前十時より岐阜別院本堂においてお勤めされました。余間には法名軸を掲げ、河村輪番の導師のもと賑々しくお勤め致しました。

お勤め後は、中垣昌美師(大阪教区讚良組善宗寺住職・龍谷大学名誉教授)よりご法話をいただき、昼には岐阜別院門徒会によるお斎が振る舞われました。

この永代経法要は毎年進納者にご案内しお勤めいたします。

今後も永代経(院号)懇志をご進納いただきますようお願いいたします。



《今此処》にはたらきつつける浄土

先日、私の叔父が急な往生を致しました。永年実家の寺の代務住職を勤めていただき、父であり師であるような大きな存在の叔父でした。実に何年もの時を経て、奈良の山間の叔父の寺院に参拝させていただきました。

石川啄木の『ふるさとの山にむかひていふことなし ふるさとの山は ありがたきかな』に尽きる山々とお寺のたたずまい。「真理ちゃん、といとこ(遠いところ)来てくれたんけ」との叔父の笑顔が見えるかのような思いで、お念仏申させていたかったです。

懐かしいふるさとです。さて、ふるさととはいかなるはたらきをしてくださるのでしょうか。東日本大震災で多くの方々が、ふるさとを失い、或は遠く離れて現在に至っています。災害でなくとも、さまざまな縁により、ふるさとを遠く隔て、あるいは喪失して暮しておられる方々があります。私もその一人です。

親鸞聖人のお弟子・覚信房のことが、『親

鸞聖人御消息』に述べられています。

『くにをたちて、ひといちと申ししとき、病みいだして候ひしかども、同行たちは帰れなど申し候ひしかども、「死するほどのことならば、帰るとも死し、とどまるとも死し候はんず。また病はやみ候はば、帰るともやみ、とどまるともやみ候はんず。おなじくは、みもとにてこそをはり候はば、をはり候はめと存じてまゐりて候ふなり」と、御ものがたり候なり。この御信心まことにめでたくおぼえ候ふ。』(註釈版聖典766頁)と。

覚信房にとつてのふるさは、まさに親鸞聖人のみもとでした。その所以は、他力真信心にご縁結んでくださった師であるからにほかなりません。いずこにても病み、死すべく生きる覚信房にとつて、ふるさに向いて往きつつ、『今此処』を生き抜くことこそが、如来の救いの御手の真只中に居続ける自身の証であったと味わわれてきます。即ち、ふるさに向いて往くいなみが、同時に『今此処』に還り続け、『今此処』を引き受けて生き

抜くいなみにほかならないことを教えてくださいます。

かつて前坊守が晩年を過ごした施設での口癖は、『うちに帰りたいなあ。真理子さん、あなたの居るうちへ』でした。病状を考えれば、到底叶わぬことを知りながらの言葉。今思い出されるのは、彼女の愛らしい笑顔ばかりです。彼女もまた、ふるさとに向いて往きつつ、『今此処』に還り続け、あるがままに懸命に生き抜いていかれたのだと味わわせていただくことです。

いっどこにいるときにも、この『今此処』の私に還り、はたらき続けてくださる笑顔・言葉・仏さまがた。ふるさと・浄土。私もまた、ふるさと・浄土に向いて往き、同時に『今此処』を生き抜く智慧と力をこの身に頂戴しています。その証は、如来さま自ら我が身に到り届いてくださり、『今此処』に我が口を突いて出てくださいるお念仏です。

華陽組等光寺住職

本願寺派布教使

小川真理子



葬送儀礼

浄土真宗における「お葬式」の意味についていろいろ誤解があるようです。

まず「お別れ会」というものと「お葬式」の違いについて考えてみましょう。

「お別れ会」といわれるものは「告別式」ともいわれますが、「お葬式」と同じであるとみなして混同されていることが多いようです。一般的に「告別式」といわれるものは、文字通り「別れを告げる式」ですから、「亡くなられた方に対して後に遺された有縁の人々が、生前を偲び、厚情に感謝して、今生の別れを告げる」という意味です。そうしますと、「告別式」は「亡くなられた方に対して、遺された人々が行うもの」という意味になりますので、そこには、「阿弥陀如来さまに相対して行う儀礼」という宗教的な意味はありません。したがって、このような意味において行われる「告別式」には、お仏壇はもちろん、僧侶の姿もあるはずもなく、読経の声も響いてきません。

次に「お葬式」の意味について考えてみましょう。「お葬式」は、「葬儀(葬送儀礼)

とも言われますように、宗教的な「儀礼」ともなうものです。そうしますと、この「儀礼」とは、私たち浄土真宗の教えを聞くものにとつて「阿弥陀如来さまに相対して執り行うもの」という意味になります。したがって、「お葬式」とは、「亡くなられた方に対して、別れを告げる」ということに終始するものではなく、「亡くなられた人も、後に遺された人も、阿弥陀如来さまのお救いの内にあるという思いの中で行う儀礼」という意味なのです。

このように、亡くなられた人に対して行う「告別式」には、宗教的な「儀礼」という意味はまったくありません。だから、阿弥陀如来さまに相対して行う儀礼という意味をもつ「お葬式(葬儀)」と混同することは、大きな誤りであると言えるでしょう。

もう一つが「鎮魂式」です。この「鎮魂式」は、お葬式と混同されていますが、これもまったくの別のものです。なぜならこの「鎮魂式」は死者のためにするものであるからです。死者の魂がこの世に迷っていて成仏できず、あの世に行けないとかわいそうであるから、または、私たちに災いをもたらしたり、死者が化けて出てきたら困るので「鎮魂式」を行うという、

遺族が死者のためにする儀式が「鎮魂式」です。故に、「葬儀式」と「鎮魂式」はまったく別物であります。

浄土真宗の教えにおいて、私たちは阿弥陀如来さまのお救いのはたらきによって浄土に生まれる身です。迷った靈魂、成仏できない靈魂というものではありません。

「葬送儀礼」の本当の意味を知ったうえで、改めて「葬儀」のあり方について考えてみてはどうですか。

岐阜教区勤式練習会理事

中川南組 教念寺

仙石教信



退任に際しての消息

本日、平成二十六年六月五日をもって、私は本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主を退任し、後を本願寺嗣法・新門に託すことになりました。

昭和五十二年四月一日、法統を継承して以来、三十七年二月になりました。至らぬことが多々あった中、今日まで務めることができましたのは、仏祖のご加護は申すまでもなく、宗門内外の方々のご支援、ご理解とご協力のおかげであります。皆様、心より感謝申し上げます。

この間、本願寺では、阿弥陀堂の修復、顕如上人四百回忌、蓮如上人五百回忌、御影堂の修復、宗祖聖人七百五十回大遠忌等のご縁を皆様とともにすることができました。さらに、北境内地を取得できたお蔭で、活動をより広く展開できるようになりました。また、宗門では基幹運動の推進とともに、さまざまの活動や事業がありました。世界各地にも、お念仏の輪が広がっています。それらを、巡教などによって身近に知り、御同朋の思いを確かめることができましたこと、まことに有り難く思います。

この三十七年間は勝如前門主の戦争を挟んだ激変の五十年に比べれば、やや穏やかとも言える時代でしたが、国内では大小の天災・人災が相次ぎ、経済価値が優先された結果、心の問題も深刻化しました。世界では、武力紛争、経済格差、気候変動、核物質の拡散など、深刻なあるいは人類の生存に関わる課題が露わになりました。その中で、心残りは、浄土真宗に生きる私たちが十分に力を発揮できたとは言えないことです。

私たちの宗門は、門信徒一人ひとりに、み教えが受け継がれるという素晴らしい伝統をもっています。これからも、社会の変動の中にあつて、浄土真宗のみ教えや伝統にある多様な可能性を見つけ出し、各人、各世代、それぞれの個性と条件を活かし、特に若い世代の感性と実行力を尊重して、一人でも多くの方を朋とし、御同朋の社会をめざして歩むことができるよう願っております。

後を継ぎます新門主は、築地本願寺で五年九か月の間、副住職を務めて経験を積み見聞を広めています。今後は、法統を護るとともに、宗門全体を思い、広く宗教界を視野に入れて、務めることとなります。皆様の一層のご支援をお願いいたします。

なお、私は、七十歳まであと一年余りとなりました。先のこととは予測できませんが、阿弥陀如来の揺るぎない本願力の中に、宗祖聖人のみ教えを仰ぎ、浄土真宗の信託としての務めを、できる限り果たしたいと思っております。

平成二十六年 六月五日
二〇一四年

龍谷門主 釋 即 如

如燈風中



岐阜教区教務所長
御同朋の社会をめざす運動
岐阜教区委員会委員長
河村 信 昭

去る6月6日第24代即如ご門主から第25代専如ご門主へ、法統を伝承される「法統継承式」がお勤まりになりました。満堂の御影堂・阿弥陀堂の両堂と白洲を埋めるお同行に、改めてお念仏の尊さを知らされることです。親鸞聖人がお示しくくださった浄土真宗のみ教えは、歴代ご門主のご化導とお念仏を依りどころとして生き抜かれた多くの先人方によって、絶えることなく受け継がれてまいりました。

第24代即如ご門主は、昭和52年4月法統を継承され、常に宗門の先頭にお立ちいただき、私たちをお導きくださいました。岐阜教区におきましても別院はもとより昭和56年12月の長良組ほか3組のご巡教をはじめとし平成16年6月の黒野・岐稲組へのご巡教まで、全14組にお出まし下さいました。常にみ教えが広く岐阜教区内の多くの人がびとに伝わるようにと心を砕いてくださいました。私は、第25代を継承いただいた大谷光淳、専如ご門主には、特に心に残るご縁を三度いただきました。小学校5年生の時、秋の夕暮れにお父様とお二人で山科の蓮如上人のご廟を参拝されたとき、平安中学の新入生オリエンテーションのとき、そしてブラジルで開催された世界仏教婦人会大会に随員としてお伴させていただきました。デ・ジャネイロのお寺をご巡回したとき、予定外のことになりました。参拝だけのはずが、ブラジル人の代表の方が、新門様よりお話がいただきたいと云うのです。予定外の事ですから断わっておりましたら、後ろからどうしましたと声がありました。事の顛末を申し上げます。新門様は、河村さん大丈夫ですと40人ほどのブラジル人の前に立ち、お言葉を述べられることでした。そのお姿に深い感銘を受けたことでした。法統を継承される御身として常に各地の現状を窺われる中で、現代社会にみ教えを伝え広めていくことの大切さについてご尽瘁いただいたてまいりました。

このたびの法統継承にあたり、即如ご門主から賜りましたこれまでのご教導を礎に、若き専如ご門主を中心に、岐阜教区一丸となつて、お念仏の声満ちる社会をめざして、受け継ぐべき事柄を受け継ぎ、同時に、時代に即応した活動をおこない、子供たちにまた社会にお念仏が広まるよう精進してまいりたいと存じます。

新職員紹介

四月一日付で二人が入所いたしました。よろしくご指導いただきますようお願いいたします。

稲川 慧海 (岐厚組専願寺)



巖后 美乃里 (華陽組願照寺)



退職者報告

三月三十一日付で退職いたしました。

鷺見亮子 (録事・承仕)

日比野たか子 (臨時勤務員)

お知らせ

岐阜別院『黎明講座』

- ・ 期日 八月一日(金)～五日(火)
- ・ 時間 午前六時半～八時まで
- ・ 場所 本願寺岐阜別院 本堂
- ・ 講師 本願寺派動学

- 一日 本願寺派動学
- 二日 内藤 知康氏
- 三日 三島市FMボイスQ
- パーソナリティー
- 本持 信慈氏
- 東北教区相馬組常福寺住職
- 廣畑 恵順氏

「東日本大震災支援金」宗派受付窓口
郵便振替 〇一〇六〇一八一〇〇
加入者名 浄土真宗本願寺派 宗務所
通信欄に「東日本大震災支援金」をご記入ください

- 四日 岐阜聖徳学園大学 短期大学部教授 蛸川 祥美氏
- 五日 本願寺岐阜別院 輪番 河村 信昭氏

岐阜教区『僧侶研修会』

- ・ 期日 八月一日(金)～二日(土)
- ・ 場所 岐阜教区教務所 二階会議室
- ・ 日程 一日 内藤 知康氏
- 二日 午前 竹本 了悟氏
- 午後 廣畑 恵順氏

編集後記

六月六日に即如ご門主様から専如ご門主様への法統継承式が行われました。法統継承に際しての消息の中で、専如ご門主様は現代に即したご法義の伝え方に英知を結集する事が必要と仰っています。とりわけ若い人達へどうアプローチしていくかが重要な事になると考えておられます。

今、岐阜別院では新たな香光殿の工事が順調に進んでいます。十月頃に完成の予定と云います。新しい香光殿が中心となり岐阜教区のご法義繁盛に役立つ事を期待してやみません。